

ヨハネによる福音書 1 章 1～18 節 (1) —「^{ことば}言は肉となって」(14) を中心にして—

はじめに

- ・「ヨハネによる福音書」を御一緒に学び始めて、ちょうど 1 年が経ちました。ヨハネ福音書は元々は 1～20 章までが本文で、21 章は一般的には、後に書き足された「^{ほい}補遺」と考えられています。
- ・そこで、その補遺の部分の 21 章を先に（しかも逆引き的に）読み進めてきました。そのようにして、前回で 21 章の学びを終えることができました。
- ・これを受け、最初に御説明したとおり、今月から福音書の冒頭に移り、1 章の初めから順に読み進めていきたいと思います。今回はその第 1 回目で、1 章 1～18 節を^{ひとくく}一括りにして読みますが、冒頭のこの箇所は全体で 3 回にわたって学ぶようにしたいと考えています。
- ・第 1 回目の今日は、14 節の「言は肉となって」を中心に、御一緒に読んでいくことにしましょう。

「初めに言があった。言は神と共に・・・」(1)

- ・「ヨハネによる福音書」の冒頭の書き出しで、これに続く一連の節は広く知られた有名な箇所です。
- ・しかし、とりわけ難解な箇所と言ってもいいでしょう。それは、ヨハネの福音書を書いてまとめた者（たち）が私たちとは趣を異にする文化圏に生き、しかも同時に 2 つの文化を背景にして語っているからです。
- ・一つはギリシア世界の文化であり、一つは旧約世界のそれです。
- ・「ことば」という語はそのいずれにおいても、単なるコミュニケーションの手段という以上の、もっと大きな意味を持つものでした。

2 つの文化的背景

1. ギリシア世界の文化

- ・ギリシア人は自然に目をやりました。するとそこには、秩序がありました。
- ・そこで、それを説明して、哲学者が言います。「そこには『ロゴス』が、すなわち『言』が存在するからだ」と。
- ・それは無限の理性を持ち、合理的な秩序を維持する全宇宙の魂のようなもので、人の理性もまた、このロゴスから来ているとされました。
- ・このように、ギリシア文化を知る者にとって、ヨハネ福音書の表現は決して疎遠なものではなく、何より重要な究極の存在や真理について語るにふさわしいものでした。

2. 旧約世界の文化

a. 旧約聖書には、神の言葉をめぐる記述がそこかしこに記されています。そして、それらは一貫して、一つの神の姿を描き出しています。言葉をもって事をなされる神です。(創世記 1：1～31、イザヤ 55：11 他 参照)

・ユダヤ人にとって、神が何事かを言葉にされると、それは、神がその何事かを言葉のとおりになされるときの時でした。言葉は、それを発する者と一体だったのです。

*それは、神がどんなお方であることを意味しているのでしょうか。

b. さらに、ユダヤには興味深い歴史があります。旧約聖書の原文はヘブライ語で書かれていますが、しかし 時とともに、元々のヘブライ語は日常の話し言葉としては使われなくなり、学者以外 ほとんど理解できなくなっていました。そこで、便宜上、^{べんぎじょう}『タルグム』という日常語訳の聖書が生まれることになりました。

・ところが、ここで問題がもち上がります。そのころ、ユダヤには、律法を破ることを極端に恐れる空気が充満していました。そのため、しかるべき手立てを考えなくてはなりません。そんな知恵の一つとしてあったのが、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」(出エジプト 20：7) という、^{じっかい}十戒の第3の戒めに関わるものでした。彼らが執った手立てはこうでした。「律法を破ったら、大変なことになる。そうだ！ 神の名をいっさい、口にしなければいい」。こうして、人々は「神」という名をそのまま口にすることを避け、別の表現をそれに当てるようになりました。そうした苦心の跡が『タルグム』にも見て取れ、『タルグム』ではじかに「神」と言うかわりに「神の言葉」と言い換えられています。例えば、出エジプト記 19 章 17 節の「しかし、モーセが民を神に会わせるために・・・」というのが、『タルグム』では「しかし、モーセが民を神の言葉に会わせるために・・・」というふうに変えられています。聖書学者によれば、「ヨナタンのタルグム」(下記「注」参照) という 旧約聖書の一部を取めたそのタルグムだけでも、こうした表現が 320 回余り出てくるといいます。

・つまり、ユダヤでは「神の言葉」と言うとき、それは神御自身を意味する場合が少なくなかったということです。それだけ神は言葉と一体で、神の語られる言葉には一点の裏もないとされていたのです。

*ということは、神はどのようなお方と信じられていたのでしょうか。

(注)「ヨナタンのタルグム」：ヘブライ語聖書のヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記(前の預言書)、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書(後の預言書)

「ヨハネ福音書」誕生の経緯

A. キリスト教はその^{ようらんき}揺籃期を、旧約聖書を共にするユダヤ教の中で育まれました。ですから、ユダヤ教の伝統文化がその背景にあったのは言うまでもありません。「ヘブライズム」と呼ばれる精神文化です。が それと同時に、「ヘレニズム」と呼ばれる文化も紀元前の頃から、パレスティナの一带にすでに浸透していました。ギリシア的な考え方に基づく精神文化です。つまり、ヨハネの福音書にまつわる人々もそうした二重の文化の中にあっただけのことです。

・さらには、ギリシア世界を知る離散のユダヤ人がキリストの教会に加わるようにもなります。「ヘレニスト」と呼ばれる人たちです。ヨハネの群れの中にもそうしたヘレニストのいた可能性のあることが言われています。

B. そうした状況のもと、ヨハネの教会はしかし、しだいに外からの圧政と内からの迫害にさらされていきます。そして、紀元 70 年、ローマ軍との戦いで、エルサレムが陥落。エルサレム神殿も破壊されることとなります。

・それは、ローマの圧政が極に達したことを意味しただけではありません。同時に、神殿を失ったユダヤ教が律法の教育とその遵守^{じゅんしゆ}の徹底を図るようになります。神殿礼拝に代わるものとして、内側から信仰を強化する以外、祖国の一致^{すべ}を図る術がなくなったからです。そして、これにともない、自分たちと異なる異分子キリスト者の迫害・排除がいよいよ強化されていったのでした。要するに、「ヨハネによる福音書」はこれらの後^{のち}、これらの出来事を受けてまとめられたということです。

・すなわち、こうした内外からの圧政と迫害のなか、ヨハネの教会はその信仰を揺さぶられ、教会から離れる者さえ現われました。しかも、パレスティナの周辺へと移動するにつれ、ギリシア的な文化とその人々により近く向き合うことにもなりました。ヨハネの教会はそのようにして、自らの信仰理解^{みづか}をいま一度、確かなものにする必要に迫られたのです。

・そうすることで、自分たちの足もとを揺るぎなくし、脱落者の出るのを防ぐとともに、すでに脱落した者たちを復帰させること。と同時に、外のユダヤ人たちに対し、イエス・キリストの理解を明確にし、彼らをも福音に招くこと。さらには、より近く向き合うようになったギリシア文化の人たちにも同様に、自分たちの信じるお方を伝えること。「ヨハネによる福音書」はそのような目的のもとにまとめられたのでした。

C. ですから、ギリシア的な精神文化とユダヤ的なそれとが絡まるようにしてそこに二重に認められるのも不思議でないのではないのでしょうか。ユダヤ教と共有する本質を押しえつつ、同時にギリシア的考え方とも照らし合わせ、イエス・キリストの信仰を明らかにしようとした。「ヨハネによる福音書」はそのような福音書と言えるでしょう。

(本シリーズ初回の「はじめに」所収『ヨハネによる福音書』を読む前に」と「添付資料：年表、地図」を参照)

「言は肉となって・・・」(14)

A. とはいえ、「言は肉となって・・・」とは、なんとも馴染^{なじ}みにくい表現ではないでしょうか。ここで「肉」と訳されている言葉は原語のギリシア語で「サルクス (σάρξ<σάρξ, σαρκός, ἡ)」^{サルコス}といい、英語では「フレッシュ (flesh)」^{ヘー}。文字どおり「肉」を意味する語です。

・実際、福音書が書かれた紀元 1 世紀の平均的な人々にとって、これはどうてい考えられないことでした。世界の秩序の根源たるロゴス、宇宙の理性の根源たるロゴス、崇高な絶対者なる言が私たちと全く同じ人間となった、というのですから。私たちと同じ一人の人となってこの世に来た、というのですから。

・そもそも、ギリシア的な考え方によれば、肉体は汚れたもの、悪しきもので、精神の牢獄でした。ですから、ギリシア世界の人々にとって、ロゴスが肉体をとるなど、夢想だにできないことでした。一方、ユダヤ人はユダヤ人で、神とは人間をはるかに超越した、高さにいますお方と考えていました。崇高な存在で、人が目で見ることなど、及びもつかないことでした。目に見える形あるものを礼拝することはすべて偶像礼拝とされ、厳しく排斥されました。このため、神的な存在が目に見える人の形をとるなど、とうてい受け入れられることではありませんでした。

*にもかかわらず、ヨハネはなぜ、こうした剥き出しな言い方をしたのでしょうか。「人となって」でも「人の体を纏って」でもなく、あえて「肉となって」と。そこになにがしか、ヨハネの考える大切な真理が置かれているように思われます。

B. 実は、当時からすでに、キリスト教会の中にも、神のようなお方が文字どおり人間になるなどありえないとする人々がいました。霊と肉の二元論に立ち、キリストを霊的な存在とした人たちです。いわゆる「グノーシス（覚知、霊知）主義」と言われる考え方に基づいていました。

・そして、例えば イエス・キリストの十字架について、次のような立場を唱えたのでした。

1) 十字架へと向かう途中、キリストはシモンというキレネ人じんに姿を変え、これと入れ替わった。だから、人々が十字架につけたのは 実は、キリストではなくシモンだった。(マルコ 15:21 以下他参照)

2) 霊のキリストは十字架につけられる前に、肉の体から離れた。

3) キリストは神から遣わされた霊であり、痛み・苦しむといった人間としての外見は見かけだけで、幻影にすぎない。

4) その他。

*しかし、あの十字架がもし このようなものだったとしたら、イエス・キリストとはいったい 何者なののでしょうか。また、そのようなイエス・キリストを遣わした神とはいったい、何者なののでしょうか。

*そこにあるのははたして、何なのでしょう。真実か、それともパフォーマンスか。愛か、それとも見せかけか。

*剥き出しの表現で「肉」と記したヨハネの真意はいったい、どこにあるのでしょうか。

.....

「真実である」とは、どういうことなのでしょう？

「愛する」とは、どういうことなのでしょう？

イエス・キリストの生涯とは、どんなものだったのでしょうか？

イエス・キリストとは、どういうお方なのでしょう？

「信仰」とは、どういうものなのでしょう？

イエス・キリストの内に、私たちははたして 何を見るのでしょうか？

「ヨハネ福音書」の冒頭に秘められたメッセージとはいったい、どんなものなのでしょう？